2026 年 11 月 16 日説教塾「説教を生かす旧約聖書釈義」　小友聡

講演 2.「エステル記をどう読み、どう説教するか」

１．　なぜエステル記か

知恵文学には「謎」（ヒーダー）が含まれ、それを解くこと（謎解き）が知恵文書を解釈するということだ、と説明した。それは、言葉から隠されたものを引き出す、明らかにすることである。格言、比喩、知恵ある言葉はそれ自体としては謎であり、それは解き明かされなければならない。その際に、言葉（ダーバール）の両義性、多義性が解き明かしのカギとなる。箴言、ヨブ記、コヘレト書、雅歌はいずれも知恵文学として謎（ヒーダー）を含み、それを解き明かすことが求められている。

具体的に言えば、箴言は、格言の比喩性を解くことによって、現世をどう生きるかが明らかにされる。ヨブ記は、「謎」が謎（神の秘義）のまま明らかにされないが、その謎を引き受けてどう生きるかが逆に問われる、という構造的な謎解きが可能である。コヘレト書は、「謎」（神の秘義＝終末の到来）を啓示的に解き明かす終末論的解釈に対して、現世の時を生きる創造論的解釈を提示する。雅歌は、神とイスラエルの契約関係が男女の愛のありようにおいて表現されている知恵文書であって、楽園状況における男女の相互的愛の表現は出エジプト時代の「神と民」の契約時の隠喩として謎解きできる。ちなみに、ルツ記も知恵文学として読み解ける。ナオミというイスラエル女性が不幸のどん底に陥るが、神は彼女を見捨てず、モアブ人ルツ（夫ボアズは「贖う者」）を通して幸いをもらし、ダビデの出生へと至らせるからである。これら知恵文書をどう読むかということは、どう解釈するかということであり、「謎解き」という概念によって読み解ける[1]。

基本的にメギロート（5 つの巻物）は知恵文書と言ってよいが、問題はエステル記である。エステル記をどう解釈するか、私はほとんどお手上げであった。この書は完結した文学作品であるが、奇妙なことに「神」の名は一度も出て来ず（雅歌もそうである）、しかもユダヤ人による復讐が称賛されている。M.ルターがこの書を「なくてもよい」と忌避したように、プロテスタント教会では、礼拝であまり用いられない、説教しづらい「知恵文学」である。このエステル記の「謎解き」をすることによって、説教への道筋を見出すのがここでの目的である。

２．　エステル記とは

エステル記はメギロートの一書である。ヒロイン「エステル」の英雄物語である。女性が主人公の文書であって、外典のユディト書、スザンナ物語に似ている。旧約ではノヴェッレ、つまり完結した物語作品（たとえば、ヨセフ物語、ルツ記、ヨナ書、ダニエル書）

---

[1] 小友聡「知恵文学のパラダイム転換」、小友/東/飯郷『知恵文学を再考する』、ヨベル、2026 年。

であって、捕囚後のディアスポラ文学である。舞台は紀元前5世紀だが、書かれたのは紀元前4〜3世紀と言われる。言うまでもないが、この書の内容はフィクション（虚構）である。しかし、フィクションだからと言って、単なる「嘘」という意味ではない。エステル記の際立った特徴は神が登場しないことで、また最後に過激な復讐賛美がある。それが今日では忌避されるために、礼拝説教のテクストとして使いづらいのである。

3．　エステル記の内容

ペルシアの宮廷が舞台である。宮廷でユダヤ人モルデカイは王の家臣。王妃ワシュティが退いた後、モルデカイの従姉妹エステルが王妃に迎えられる。しかし、宰相ハマンがユダヤ人絶滅計画を企て、王の許可によってそれが決定される。モルデカイはエステルに危機を訴え、彼女はそれに応えて行動を起こす。それによって、ハマンの企ては阻止され、ユダヤ人は救済される。その際、ユダヤ人絶滅を企てた人々への復讐が賛美され、また、このユダヤ人救済の出来事はプリム祭の起源となった。

4．　エステル記の構造（対称的集中構造）[2]

A		1-2 章	宮廷の祝宴
	B	3-4 章	宰相ハマンのユダヤ人絶滅計画
		C 5:1-8	エステルの計画遂行 I
		D 5:9-6:13	モルデカイをめぐるハマンと王の対照
		C’ 6:14-7:10	エステルの計画遂行 II
	B’	8:1-14	宰相ハマンのユダヤ人絶滅計画の無効
A’		8:15-10:3	喜びと祝宴

5．　エステル記の謎

エステル記には解明されなければならない謎がある[3]。「知恵」の目的は、それを解くことであるゆえに、それらの謎を挙げてみる。

① エステル記には「神」の名が一度も出て来ない。雅歌もそうであるが、エステル記に

---

[2] 左近淑「詩編および文学的小品」『総説旧約聖書』、日本キリスト教団出版局、1984年。

[3] 聖書考古学的な謎として、エステル記の写本断片が死海写本の中に一つも存在しないという問題がある。それが偶然でないとすれば、なぜか。クムランがエステル記を拒否したのか、それともエステル記は紀元前2世紀のクムラン成立時にはまだ成立していなかったか、そのいずれかである。蓋然性があるのは前者だと考えられるが、その理由ははっきりしない。エステル記は文書として保存する必要がない、とクムランが判断したのかもしれない。

おいて「神」の不在は意図されたものなのか。

② モルデカイはマルドゥク（ペルシアの男神)、エステルはイシュタル（ペルシアの女神）と酷似している。エステル記の舞台背景がペルシア時代である以上、これは偶然ではなく、ここには意図があるに違いない。しかし、いったいなぜ異教の神々の名がエステル記においてユダヤ人の登場人物に似せられているのか。

③ 宿敵ハマンは 8:5 では「アガク人」として紹介される。ペルシア人ではなく、「アガク人」なのはなぜか。

④ モルデカイもエステルも捕囚の民である。しかも、2:5 によれば、ベニヤミン族出身である。ここに意図されていることは何か。

⑤ いったいなぜ過激な復讐が賛美されているのか。復讐はどういう意味があるのか。

⑥ そもそもエステル記は何を語ろうとする書なのか。エステルという単なるヒロインの英雄物語なのだろうか。

６．　エステル記の謎解き

以上のエステル記の謎について、講演①の「解釈から釈義へ」というプロセスを念頭に置き、謎解きを試みたい。最終的に説教の言葉を見出すことが目的であるゆえ、その方向で考えてみる。この講演の主題「説教を生かす旧約釈義」の具体的な考察とする。

①エステル記で「神」の名がないのは意図されている。エステル記では、神は隠れていて姿を現さないのである。それは、いわば神なき時代を暗示している。ペルシア帝国下でのユダヤ人はまさしく「神」なき時代を生きている。しかし、神は決して存在しないのではない。隠れて見えないだけである。４章 14 節に「もし、この時にあなたが黙っているなら、ユダヤ人への解放と救済が他の所から起こり、あなたとあなたの父の家は滅びるであろう。」と記されるが、「他の所から」が注目に値する。これは、隠喩的で、象徴的であって、「神」の発動を表現している。言い換えると、隠れていても神は生きて働くという、モルデカイによる信仰告白である。エステル記にはまた「くじ」（プル＝プリム）による不思議な、摂理的な時の作用が見られるが、そこにも神の存在が隠されている。ペルシア時代の都スサにおいて生きるユダヤ人は神なき世を生きるが、見えざる神に導かれ、とことんまで神との契約を守るという信仰がエステル記における「神」の不在において告白されているのである。

②モルデカイという名は、音韻上、間違いなくペルシアの男神「マルドゥク」に由来する。また、エステルという名も間違いなくペルシアの女神「イシュタル」に由来する。これは偶然ではなく、意図的である。捕囚の民は、ペルシア世界で民族固有の名を奪われ、異教の神の名を付与されるという過酷な経験をしていることを暗示させる。特に、ペルシアの宮廷では、そうするしか彼らに生きる道は見出せなかったに違いない。ダニエル書

で、宮廷でネブカドネツァル王に仕えるダニエルがベルテシャツァルというバビロニア名を名乗らされたことと同じである（1:7）。ディアスポラのユダヤ人たちは、このような民族アイデンティティー剥奪という過酷な試練を余儀なくされた。しかし、それにもかかわらず、毅然として、神の民として生きるという覚悟がエステル記には読み取れる。彼らは試練の中でも決して同化しなかったのである。

③宿敵ハマンは「アガグ人」と紹介されている（8:5）。エステル記は虚構の物語であるゆえに、「アガグ人」という出自には意味がある。アガグという名は、サムエル記上 15:8 では、アマレクの王の名前である。このサムエル記では、サムエルがサウルに対して、アマレクを討ち、容赦せず滅ぼし尽くすことを命じた。かつて、エジプト脱出の際に、アマレクがイスラエルを妨害したことを忘れず（出エジプト記 17:8-16、申命記 25:17-19）、アマレク人の子供も乳飲み子も一人残らず打ち殺すことがサウルの使命であった。しかし、サウルはそれに従わず、アマレクの王アガグを生かした。そのために、サムエルはサウルを叱責し、サウルを王位から退け、サウルの目の前でアガグを切り殺した（サム上 15:33）。この出来事がエステル記においてハマンの出自「アガグ人」の背景にある。つまり、ハマンはアマレク人を象徴し、イスラエル対アマレクという歴史が物語の下地になっているのである。アマレク人（＝ハマン）はイスラエル人にとって、決して容赦してはならない宿敵である（出エジプト記 17:16）。ハマンがペルシア帝国下のすべてのユダヤ人を滅ぼそうと企てたことは、もちろん虚構ではあるが、エジプト脱出の際にアマレク人がイスラエルを妨害し、イスラエルに敵対したことを暗示し、その歴史を忘れるなという申命記 25:19 に基づいている。

④モルデカイもエステルも捕囚の民である。バビロン捕囚が終わっても、バビロニアに留まり続け、ペルシア帝国下でも、ディアスポラの民として、異教の地で生き続けた。そのモルデカイは、「キシュの子シムイの子であるヤイルの子で、ベニヤミン族の人であった」と紹介されている（2:5）。もちろん虚構ではあるが、モルデカイは、また従姉妹のエステルも、ベニヤミン族の出身である。言うまでもないが、周知のとおり、サウルはベニヤミン族出身の王であった。しかも、彼は「キシュの子」であった（サムエル記上 9:1）。一方、エステル記では、モルデカイは「キシュの子」の孫と紹介されている。これは偶然ではない。つまり、モルデカイの出自はサウルを暗示させるのである。かつて、サウルは宿敵アマレクの王「アガグ」を生け捕りにして殺さなかったゆえに、サムエルに断罪され神に捨てられた（サム上 15:28）。その汚名を着せられた物語がエステル記の背景になっている。ベニヤミン族出身のモルデカイはエステルと共に、そのサウルの汚名を、宿敵アガグを倒すことによって拭い去ったのである。モルデカイがハマンの処刑において容赦しなかった理由がわかる。

このことは何を意味するだろうか。歴史的に考えれば、捕囚後のベニヤミン族が 12 部

族の中で、社会的地位を獲得したことを意味する（ベニヤミンはヘブライ語で「幸いの子」を意味する）。捕囚後のユダヤ教団は、ユダ族が中心であったが、それにベニヤミン族も加わった（エズラ記 1:5, 4:1）。サウルの王権失墜のゆえ負の遺産を担い続けたベニヤミン族が、捕囚後のユダや教団においてユダ族（旧南王国ユダ）と肩を並べるため、エステル記はまさしく「ベニヤミン族復権の物語」として必要だったのである。これはエステル記の謎解きとして説明できる。ちなみに、新約聖書では、使徒パウロはベニヤミン族出身で（フィリピ 3:5）、キリストと出会うまではヘブライ語で「サウル」という名であった（使徒 9:4）。

⑤エステル記では、なぜ復讐が賛美されるのだろうか。この復讐賛美はプロテスタント教会では受け止められない箇所である（8 章以下）。ユダヤ人による殺人賛美であって、キリスト教ではとうてい受け入れられない。それゆえに、エステル記は旧約聖書になくてもよい文書だとも言われた（M.ルター『卓上語録』）。ユダヤ教では、今日でも、プリム祭にこのエステル記が朗読され、ハマンが処刑される個所では、皆が歓声を上げるそうだ。二千年の歴史でホロコーストを免れたユダヤ人にとって、エステル記は自分たちのアイデンティティーを確認できる書なのである。

しかし、容赦のない復讐賛美は、どう考えても、受け止めきれない。復讐賛美をどう説明できるだろうか。旧約聖書において説明できることは、律法にある復讐法である。「命には命、目には目、歯には歯」という復讐法においては、受けた害に対して、それに相当するものを加害者に対し「正当なこととして」要求することができる（出エジプト記 21:24）。かつてアマレクがエジプトを脱出した直後のイスラエルを容赦なく攻撃し、滅ぼそうとした。それゆえに、滅ぼす者「アマレク」に、「滅ぼすことをもって」対抗することは正当である、と言えるだろうか[4]。エステル記において、「容赦ない」ユダヤ人絶滅を企てたハマンとその仲間たちに対し、モルデカイがエステルと組んで「容赦ない」報復をしたことは、その意味で、説明可能である。

しかし、復讐法で重要なのは、「受けた害」以上の害を敵に与えることはできないということである。それは、当然のことながら、復讐の連鎖を断ち切るためにほかならない。エステル記を読むと、宿敵ハマンの財産略奪は禁じられている。「しかし（ユダヤ人は）略奪はしなかった」（エステル記 9:10, 15, 16）。「略奪はしなかった」が三回繰り返され、ハマンへの復讐に制限があったことが認められる。このあたりが復讐賛美には制限があるという、わずかだが誤解解消としての指摘にはなるだろう。しかし、キリスト教的には、復

---

[4] この「アマレクを忘れるな、アマレクを滅ぼせ」（申命記 25:17-19）を政治的標語にしたのが現在のイスラエルのネタニヤフである。イスラエルのガザに対する報復は申命記の「アマレクを滅ぼせ」に基づいている。しかし、そのガザへの報復は果たして、受けた害にふさわしい、正当な報復であるかどうかが問われている。

讐ではなく赦しを説くキリストの福音の言葉に聴かねばならない（マタイ 5:38-42)。

⑥エステル記はいったい何を語ろうとする書なのだろうか。一般的には、エステルというヒロインの決断によって、ユダヤ人絶滅計画が阻まれるというハッピーエンドの英雄物語として読まれる。また、そういう古代の短編小説と理解することはできる。しかし、神は登場せず、またエステル記はむしろモルデカイが主人公の物語として説明することもできるだろう。そこで、語彙的な解釈が謎解きとして有効になる。この書のタイトルは「エステル」である。ヘブライ語の「エステル」はアレフから始まっており、これは動詞サータルの未完了形 1 人称単数と酷似している。サータルは辞書的には「隠す」という意味である。そうすると、「エステル」の意味は、「私は隠れる」（nif.）あるいは「私は隠す」（hif.）である。これは、私（＝神）は自らを隠すが、人（エステル）を通して御業を実現する、ということを暗示している。エステル記の謎は書名から解けてくる！

エステルは最初、ユダヤ人救済のため行動することを躊躇するが、モルデカイは、「このような時のためにこそ、あなたは王妃の位に達したのではないか」と迫った（14 節)。エステルは最終的に決断し、「法に背くことですが、私は王のもとに行きます。もし死ななければならないのであれば、死ぬ覚悟はできております」と応答した（16 節)。この緊張した対話において、モルデカイは、もしエステルが決断しなければ、隠れた所から神は発動するだろうと語った（14 節)。これを預言として理解すると、神はエステルを通してご自身の救済計画を実現した、ということである。それゆえ、エステル記とは、「エステル」という、思いがけない「隠れた」人物（ペルシア宮廷にいる女性！）を用いて、隠れている神がイスラエルのための救済を実現する、という物語ではないだろうか。言い換えると、信仰共同体が危機の時に、信仰の決断により行動を起こすべきことがエステル記の主題であり、それを聞き手（会衆）に促すことがエステル記の目的ではないかと考えられる。神なき時代に、信仰者はどう生きるか。エステル記は、隠れてはいるが、しかし選ばれた者に向かって、呼びかけているのである。それは、今日、私たちキリスト者への問いかけでもある。

７．　まとめ

以上、エステル記の謎解きを試みた。テクストに含まれる謎を解くこと、つまりテクストの言葉を解釈することが知恵文学において求められている。知恵文学とはそういう旧約文書である。箴言やヨブ記やコヘレト書、あるいはまた雅歌だけではない。エステル記もまたそのような「謎解きの書」である。そのエステル記を、解釈から釈義へという流れを意識しながら、謎解きとして説明した。今日は、「説教を生かす旧約聖書釈義」という主題で論じてきたが、はたしてそのような講演になっただろうか。知恵文学、とりわけエステル記から、たとえわずかであったとしても、語るべき福音の言葉、説教への言葉が見えてくるならば幸いである。